

## PEG 困難症例に対する PEG キットを用いた開腹胃瘻造設術

三重県立志摩病院 外科 飯澤祐介

嚥下困難患者に対する経腸栄養の有用性は周知の事実であり、経腸栄養のアクセスルートとして経鼻経管に比べ安全性や造設後の簡便性から胃瘻が用いられることが多い。胃瘻造設には内視鏡あるいは開腹による術式があり、低侵襲性と簡便性からは経皮内視鏡的胃瘻造設術 (PEG) が第一選択である。しかしながら、開口障害や進行した頭頸部癌、食道癌などにより、経口的に内視鏡の挿入が不可能な場合 PEG を行うことが困難である。また盲目的な穿刺手技に伴い、比較的頻度の低い合併症であるが、結腸や肝臓の誤穿刺の報告がある。その一方で、古典的な開腹術による胃瘻造設術には Witzel 法や Stamm-Kader 法が代表的であるが、術後早期の管理や長期の日常管理やカテーテル交換時などに問題点が多い。我々は、PEG 困難な 5 症例(男性 2 例、女性 3 例)に、PEG キット(Direct イデリアル PEG : オリンパスメディカルシステムズ社)を用いた胃瘻造設術を施行したので、その手術主手技と有用性について報告する。平均年齢  $81 \pm 13$  歳、手術時間  $35 \pm 5.3$  分であった。1 例は胃瘻開始までの期間に原疾患の増悪で死亡したが、残りの 4 例の胃瘻開始までの期間  $9.3 \pm 11$  日であった。胃瘻に伴った合併症としては、胃瘻周囲炎 1 例、創部感染 1 例、肺炎の増悪 1 例であった。本法は開腹術であるが、手術時間が短く、手技も比較的簡単で特殊な器具を必要としないため、安全かつ簡便に施行できた。また PEG 用に開発されたカテ - テルを用いることにより、カテ - テル交換や長期の管理が簡便で、日常管理のうえで利点あると考えられた。